大学生における自己評価維持モデルの検討

－他者との心理的距離および遂行内容への関与度の観点から－

戸谷紀子*・田邊敏明

An investigation of self-evaluation maintenance model in University Students：From the view points of psychological distance to others and relevance to their performance

TOYA Noriko, TANABE Toshiaki

(Received September 28, 2012)

キーワード：自己評価維持モデル，状態自尊心感情，心理的距離，関与度

問題及び目的

例えば，仮に自分と仲の良い友達が芥川賞をとったならば，その友達を誇らしく思うだろう。しかし，もし自分も作家になりたいと思っていたなら，その場合にはその友達の成功を素直に喜べるだろうか。普通ならば，自分と友達の才能を比べて，その差に落ち込むのではないだろうか。

今まで自分と他者を比較する社会的比較について多くの研究が行われてきたが，その中でも，相手との関係や，比較する内容の重要さが，自己評価の変化に影響する社会的比較の理論を，自己評価維持モデル（self-evaluation maintenance model:以下SEMモデル）という。

このSEMモデルとは，Tesser（1984）によって提唱された考え方で，人はポジティブな自己評価を維持しようと動機づけられる，という基本的前提から成り立っている。もし，自己評価が低下するような状況であれば，低下が最小限にとどまるようにし，反対に，自己評価が向上するような状況であれば，積極的に自己評価の向上のために利用するとされる。

このとき，自己評価は３つの変数から規定されるが，まず1つ目は，心理的距離である。この心理的距離の概念はHeider(1958　大橋訳　1978)の自己とユニット関係の概念に似ており，他者の生まれ・年齢・経歴・容姿・物理的近接性などが自己と類似することに伴って，より自己と他者の心理的距離が近くなると考えられる。２つ目は関与度で，これは他者の遂行が自己にとってどれだけ重みがあるか，つまりは，自己定義にどれだけ関わっているかによって変化する。３つ目は，他者及び自己の遂行内容であり，他者が達成した遂行内容が自分より優れているかどうかで決まる。

以上の３つの変数が組み合わさることで，SEMモデルでは自己評価の向上と低下を導く２つの過程が見出されている（磯崎，1998)。一つ目は，反映過程（reflection process）といい，二つ目は，比較過程（comparison process）という。反映過程は，心理的距離が近い他者の優れた遂行によって，自己評価が上げられる過程である。比較過程は，心理的距離が近い他者の

*山口大学大学院教育学研究科

優れた遂行によって，自己評価が下げられる過程である。

この相反した２つの過程のうち，どちらが生起するかは，遂行内容に対する自己への関与度が影響しており，関与度が低い場合であれば，心理的に近い他者の優れた遂行は自己にとって心地よいものであり，自己評価が上がる反映過程が生じる。逆に，関与度が高ければ，自己にとって脅威となり自己評価が下がる比較過程が生じるのである。以上，これがSEMモデルの基本的な考え方である。その図をFigure 1に示す。

しかし，自己評価が下がるというのは人にとって避けたい状況であることから，そのような状況に陥ると，人は前述した3つの変数を状況に応じて巧みに変えることで，自己評価を維持・高揚させるのである。例えば，Gibbons et al.（1994）によれば，相手の優れた遂行を低く評価したり，他者との比較をやめ自分との比較を増やすことや，関与度を低下させる，といった防衛的比較方略をとることで，自己評価の低下を防ぐことが明らかとなっている。他にも，自分と他者の類似性の否定（Staperu & Johnson, 2007）や，他の点での社会的比較の増加（Wood, 1999），心理的距離の操作（Campbell & Tesser, 1984）などによって自己評価の低下を防ごうとするのである。

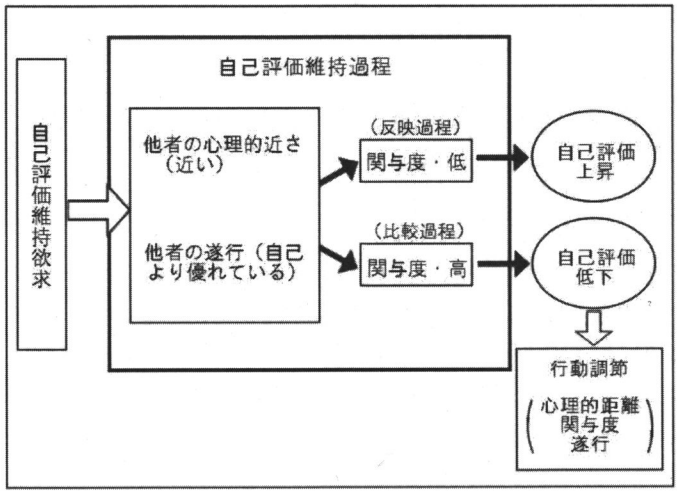

Figure 1　SEMモデルにおける比較過程と反映過程の生起（磯崎, 1998）

さて，ここで今回のような比較場面において評定される自己評価とはどのようなものであろうか。磯崎（1990）によると，自己評価とはその時々によって変化するある種の認知的状態と述べられている。そこで，今回の自己評価の評定には，状況によって変化する状態自尊感情を用いて，比較場面という一時的な状況での自己評価の変化を評定したいと考えた。

この状態自尊感情というのは，自尊感情を２種類に分けた時の1つで，安部・今野（2007）によると自尊感情は，状況によって変化する“状態自尊感情”と，比較的安定した“特性自尊感情”の2つに分けて捉えることができる。この２つの自尊感情の定義は，状態自尊感情は，“現時点の自分に対して感じる全体的な評価であり，日常生活の出来事などに対して変動する”とされ，特性自尊感情は“時間や状況を通した自分に対して感じる全体的な評価であり，比較的安定したもの”とされている。安部・今野（2007）は，この状態自尊感情を測る尺度を作成しており，山本他（1982）の自尊感情尺度を用いて，各項目文を「いま，…感じる」と修正し，全部で９項目からなる状態自尊感情尺度を作成している。今回はこの状況自尊感情尺度を用いて，状

況によって変化する自己評価の評定を行う。

次に，磯崎・高橋（1988）や桜井（1992）などの従来の研究では，小・中学生や高校生に対して，自己と他者の授業の成績を評価させ，その評価を条件ごとに比較することで，SEMモデルの検討を行ってきた。その結果，SEMモデルの予測通り，どの年代でも心理的距離が近い他者と授業の成績を評価した際は，関与度が高い場合は自分の方が優れていると評価し，関与度が低い場合は他者の方が優れていると評価することが分かった。しかし，小・中・高を対象とする研究は，人間関係が比較的固定化されたクラスで，しかも同じ授業を受けるという統制された条件で検討できるが，一方で，日常に近い自然な場面での自己評価維持モデルの検討も必要と思われる。その面では，大学生は，専門も多岐にわたり，つきあいも比較的自由であるので，日常に近い自然なセッティングと考えられる。しかも，近い将来の就職等で自己の将来像も見えてくるので，小・中・高以上に自己評価の維持を迫られる状況に置かれている。

従って本研究では，大学生を対象とした自己評価維持モデルの検討を行うことにし，授業の成績評価という限られた場面というより，広く日常にありうる場面を新たに想定する必要がある。そこで今回の研究では，大学生を想定してSEMモデルに影響する変数を組み合わせた刺激文を新たに作成し，場面想定法を用いることで，大学生を対象に比較場面において状態自尊感情がどのように変化するかということからSEMモデルの検討を行うこととした。

本研究の目的は，大学生を対象に他者が自分より優れた遂行をしたという前提の上，心理的距離と関与度の要因を組み合わせた各条件の刺激文を場面想定法によって想起した場合における，状態自尊感情の変化からSEMモデルを検討することである。

仮説は以下の通りである。まず，心理的距離が近く関与度が高い場合には比較過程が生起し状態自尊感情は低下するが，関与度が低ければ反映過程が生起し状態自尊感情は高まるだろう。一方で，心理的距離が遠い場合は心理的距離を遠く認知することで自己評価の低下を防ぐことから，他者の優れた遂行も自己に脅威を与えず，比較過程も反映過程も生じないので，状態自尊感情に変化はみられないだろう。

方法

予備調査

目的　今回の調査に使用する刺激文の妥当性を確かめるために行った。

刺激文の作成　刺激文は他者が自分より優れた遂行をしたという状況を前提の上，研究者自身が各条件にあっていると判断した内容を文章化した。刺激文は，心理的距離（近い・遠い）と関与度（高い・低い）の文章を組み合わせ，心理的距離が近く関与度が高い条件（近・高条件），心理的距離が近く関与度が低い条件（近・低条件），心理的距離が遠く関与度が高い条件（近・高条件），心理的距離が遠く関与度が低い条件（遠・低条件）の4種類を作成した。

まず，心理的距離に関する文章は自分と他者の関係についての内容で，心理的距離の近い条件では，同じ学部学科の親しい友人とし，心理的距離の遠い条件では，同じ学部だが顔見知り程度とした。次に，関与度に関する文章は他者が自分よりもどのような優れた遂行をしたかという内容で，関与度が高い条件の内容は，自分は特待生になりたかったが比較相手が選ばれたとし，関与度が低い条件の内容は，一般教養テストの成績順位が自分は下の方だが比較相手は上位の成績であったと設定した。ただし，関与度の文章は心理的距離の条件と組み合わせても，不自然にならないよう調節した。

方法　2011年12月上旬に，大学生を対象に，講義の終わりに調査紙を配布した。回答者は56

人であった（男性32人，女性24人，平均年齢19.0歳）。調査紙は自尊感情尺度，刺激文，心理的距離と関与度の評定，過去の経験の自由記述，防衛的比較方略に関する質問から構成されていた。刺激文の妥当性の確認のためなので，分析には心理的距離と関与度の評定のみ用いた。

結果　心理的距離の評定で心理的距離の主効果に有意な差がみられたが（$F(1,48)=12.27$，$p<.001$），関与度の評定では関与度の主効果に有意な差はみられなかった。これは，関与度の評定の平均から関与度が低い条件でも関与度を高いと評定したためと考えられるので，最初に作成した刺激文を改良することにした。

心理的距離の場合，近い条件と遠い条件の差をより明確にするため，心理的距離が近い条件では，結果では主効果がみられたが，より差を出すために，「お互いの気持ちを言い合える仲」，「同じサークルに所属」，といった文章を加え，遠い条件では「同じ年に同じ学部に入学した同級生」と文章を，「同じ学部の学生」に修正した。

関与度の場合，関与度が高い条件では，「特待生に選ばれることは自分の成績を認められること」という内容を付け加えた。関与度が低い条件では，関与度を下げるために，「就職支援部による就職支援の一環による一般教養のテスト」というのを，「文部科学省による大学生の教養に関する調査」とした。また，「自分と比較相手の順位の比較」という内容を，「成績上位者のみ通知がくる」とした。

次に，心理学を専攻する８人の学生に，新たに作成した刺激文の心理的距離と関与度の評定を行ってもらった。ただし，評定してもらった条件は近・低条件と遠・高条件のみであった。それぞれ心理的距離と関与度の評定において要因による差があるかどうかt検定を行ったところ，それぞれに有意な差がみられた（$t(7)=-3.05$，$p<0.5$；$t(7)=4.44$，$p<0.5$）。よって，作成した刺激文を調査に用いることにした（刺激文は巻末資料を参照）。

本調査

調査対象者および調査手続き　2011年12月中旬に，大学生を対象に質問紙調査を実施した。冊子は刺激文の内容が異なる４種類あり，ランダムに配布された。そのうち，記入漏れや記入ミスのあった回答を除き，有効回答者の178名（男性62名，女性121名，平均年齢20.10歳）を分析対象とした。各条件の人数は近・高条件48名，近・低条件43名，遠・高条件48名，遠・低条件44名であった。

質問紙構成

状態自尊感情尺度　安部・今野（2007）の状態自尊感情尺度を用いた（Table1）。尺度は「いま，自分は人並みに価値のある人間であると思う。」，「いま，自分には色々な良い素質があると思う。」などの９項目から構成されている。なお，各項目群の“感じる”を“思う”に一部修正した（ただし，問７のみは“感じる”のままである）。“非常にあてはまる（７）”，“かなりあてはまる（６）”，“ややあてはまる（５）”，“どちらでもない（４）”，“ややあてはまらない（３）”，“ほとんどあてはまらない（２）”，“全くあてはまらない（１）”の７件法で評定させた。

評定は２回行われ，１回目の評定は刺激文を読む前に評定させた。２回目は，刺激文を読ませ過去の経験について自由記述させた後にもう一度評定させた（以降，評定１回目と評定２回目と表記する）。評定１回目の指示文は“次の特徴について，「全くあてはまらない（１点）」から「非常にあてはまる（７点）」までのうち，最も当てはまると思う数字に○をつけて下さい。ただし，前の回答は見返さないで，今の考えを答えて下さい。”とした。評定２回目の指示文

は“前のページの例文を読んで，その内容を自分にあてはめて想像した場合”という文を，評定１回目の指示文の前に付け加えたものを使用した。

刺激文　予備調査で最終的に得られた刺激文を用いた。刺激文は心理的距離（近い・遠い）と関与度（高い・低い）について記述した文章を組み合わせた4種類がある。刺激文は２段落で構成されており，一段落目に心理的距離に関する文章，二段落目に他者によってどのような優れた遂行がなされたかに関する文章が書かれた。心理的距離が近い人は，同じ学部学科で，サークルも同じ友人という設定にし，遠い人は同じ学部だが顔を知っている程度の他人と設定した。関与度が高い場合の遂行内容は，他者が特待生に関わる内容，関与度が低い場合の遂行内容は一般教養テストの結果と設定した。

心理的距離と関与度の測定　操作の確認のため，刺激文を読んだ後に心理的距離と関与度に関して７件法で評定させた。心理的距離に関する質問項目は「自分とAさんの心理的な距離は近く感じた。」とし，関与度に関する質問項目は「Aさんが達成した内容は，自分にとって重要な内容だと感じた。」とした。指示文は“例文を読んで，その内容を自分にあてはめて想像した場合，次の文章に対して，「全くあてはまらない（１点)」から「非常にあてはまる（７点)」までのうち，あなたの考えに最も当てはまると思う数字に○をつけて下さい。”とした。

過去の比較場面の自由記述　刺激文における代理体験を強化するために，他者が自分より優れた遂行を行ったという，過去に自分が経験した内容について書かせた。優れた遂行をした他者と，その内容に対する関与度は，刺激文が表しているものと揃えた。指示文は近・高条件の場合は“例文のように，あなたにとって心理的な距離が近い他者が，あなたにとって心理的に重要である分野で成功した，という経験について，具体的な相手と内容を書いて下さい。”とした。他の条件の指示文では，各条件の内容と一致するように，“近い他者”を“遠い他者”，“重要である”を“重要でない”と置き換え，それを指示文とした。

Table 1　状態自尊感情尺度（安部・今野，2007）

1．いま，自分は人並みに価値のある人間であると感じる。
2．いま，自分には色々な良い素質があると感じる。
3．いま，自分は敗北者だと感じる。(逆転項目)
4．いま，自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる。
5．いま，自分には自慢できるところがないと感じる。(逆転項目)
6．いま，自分に対して肯定的であると感じる。
7．いま，自分にほぼ満足を感じる。
8．いま，自分はだめな人間であると感じる。(逆転項目)
9．いま，自分は役に立たない人間であると感じる。(逆転項目)

結果

心理的距離と関与度　刺激文に対して心理的距離と関与度が各条件において適切に認知されていたかを確認するために，心理的距離と関与度に対する評定を条件ごとに比較した（Table 2)。その結果，まず心理的距離の評定では，近・高条件はM=4.29，SD =1.56，近・低条件はM=3.90，SD =1.39，遠・高条件はM=3.12，SD =1.36，遠・低条件はM=2.52，SD =1.21となっ

た。心理的距離に主効果がみられ（$F(1,179)=37.35$, $p=<.001$），心理的距離が近い条件の方が心理的距離を近いと評定した。関与度の評定では，近・高群は$M=4.77$, $SD=1.56$，近・低群は$M=4.62$, $SD=1.36$，遠・高群は$M=3.83$, $SD=1.39$，遠・低群は$M=2.95$, $SD=1.55$となった。関与度に主効果がみられ（$F(1,179)=32.39$, $p=<.001$），関与度が高い条件の方が関与度を高く評定した。よって，心理的距離と関与度が刺激文によって操作できたことが確認された。

Table 2　各条件における心理的距離と関与度の評定と標準偏差

	近・高条件	近・低条件	遠・高条件	遠・低条件
心理的距離	4.29（1.56）	3.90（1.39）	3.12（1.36）	2.52（1.12）
関与度	4.77（1.56）	4.62（1.36）	3.83（1.39）	2.95（1.55）

過去の比較場面の自由記述　過去の経験について記述した人数は183人中136人であった。この自由記述の内容の影響をみることは目的ではなかったので，この自由記述は分析には用いなかった。

状態自尊感情得点　状態自尊感情得点は反転項目である３，５，８，９の得点を修正し，その合計を足して算出した。その結果はTable 3に示す。

Table 3　各条件における状態自尊感情得点の平均値と標準偏差

		近・高条件	近・低条件	遠・高条件	遠・低条件
状態自尊	１回目	38.60(8.13)	37.32(8.75)	35.03(32.52)	38.27(7.30)
感情得点	２回目	34.87(7.70)	37.76(8.94)	32.52(7.17)	38.52(7.98)

３要因の分散分析

心理的距離（近・遠）×関与度（高・低）×評定の時期（評定１回目・評定２回目）の分散分析を行った（評定の時期のみ実験参加者間要因である）。その結果，関与度の主効果が有意であった（$F(1,179)=6.57$）。また，関与度と評定時期の交互作用に有意な差がみられ（$F(1,179)=9.97$, $p<.005$），心理的距離と関与度の交互作用には有意な傾向がみられた（$F(1,179)=3.23$, $p=<.10$）。

関与度と評定時期の交互作用が有意であったので，単純主効果の検定を行った結果，評定２回目において，関与度の単純主効果が有意であり（$F(1,358)=13.96$, $p<.001$），関与度が高い条件の方が，関与度が低い条件より有意に低かった。また，関与度が高い条件において，評定２回目の方が評定１回目より状態自尊感情得点が有意に低くなった。

考察

今回の研究の目的は，自分より他者の方が優れた遂行をしたという比較状況において，心理的距離と関与度を中心にSEMモデルを検討することであった。以下は，仮説が検証されたかどうかを中心に考察する。

まず，関与度が高い条件では，心理的距離に関係なく，評定２回目の方が評定１回目より状態自尊感情得点が低くなるという結果となった。つまり，他者の優れた遂行内容が自己の評価に脅威を与える場合は心理的距離に関係なく比較過程が生起しやすく，状態自尊感情得点が下がったと考えられる。SEMモデルによると，まず，関与度が高く心理的距離が近い場合は，

最も自己が脅かされるので自己評価は低下し，次に，関与度が高く心理的距離が遠い場合は，心理的距離が近い時ほど自己評価は脅かされず自己評価に変わりはないとされる。つまり，SEMモデルでは同じ関与度が高い場合でも，心理的距離によって自己評価の変化に差が表れると考えられるが，今回の結果では心理的距離が近い条件・遠い条件のどちらにおいても状態自尊感情得点は低下していた。よって，心理的距離が近い場合は仮説と一致しているが，心理的距離が遠い場合は仮説とは異なる結果となった。これは，関与度が高い場合において，心理的距離が遠い場合でも，近い場合と変わらないほど自己を脅かされたように感じ，状態自尊感情が低下したためと考えられる。これについては，心理的距離の遠い条件は，学部でたまにすれ違う程度の人を想定したが，同じ学部生という類似性ゆえに心理的距離を比較的に近く感じ，比較過程が生起したためと考えられる。また大学生という，将来像が確実に見えてくる段階では，他の大学生の動向が自尊心を脅かすものとして認識されると思われ，特に専門性つまり自我関与が高い領域では，他者の遂行内容によって自己評価が強く影響されると思われる。

次に関与度が低い場合では，心理的距離に関わらず，評定時期1と評定時期2の状態自尊感情得点に変化はないという結果となった。つまり，他者の優れた遂行内容が自己の評価に脅威を与えない場合は，比較過程も反映過程も生じず，状態自尊感情得点に変化がなかったと考えられる。SEMモデルによると，関与度が低い場合，心理的距離が近ければ反映過程が生じ自尊感情は向上し，心理的距離が遠ければ自尊感情に変化はないとされるが，今回の結果では，心理的距離が近い条件・遠い条件どちらにおいても状態自尊感情得点に変化は見られなかった。このような結果となった理由としては，社会的比較過程理論では遂行レベルがあまりに異なる他者は，関与度が高いにせよ，比較の対象になりにくいということが示唆されている（磯崎，2003）ことから，他者が特待生に選ばれるというのは比較過程が生起しにくかったのではないかと考えられる。特待生に選ばれるということは，知的能力に関係することなので関与度は高いが，遂行レベルとしてはとても高いと認識され，比較過程が生じにくかったため，従来とは異なると結果となったと思われる。

よって，心理的距離が近く関与度が高い場合と心理的距離が遠く関与度が低い場合の仮説は支持されたが，一方で，心理的距離が近い場合は関与度が低い場合には自尊感情が上昇せず，また，関与度が高いと心理的距離が遠い場合にも自尊感情が低下したりと，仮説の一部は支持されなかった。

以上，大学生は自己の将来像が明確に見えてくる時期であり，他者の成功にあやかるような社会的比較での反映過程は生じにくく，常に同年齢の他者と自己を比較するような敏感な年代であると言えよう。

今後の課題

本研究では大学生の授業形態を考慮し，従来の研究とは異なり，刺激文による状況の想起および想像により自己評価の変化を測定する方法を用いた。しかし，この種の方法では得られた結果がどの程度実際の反応を反映しているのかという問題が挙げられる。特に今回は自己を脅かされる状況の想起であり，自己評価が脅かされることを無意識のままに回避した可能性も考えられる。そこで，次の研究ではそのような状況を実験的に作りだし，その場で実際に比較状況を体験することで，より現実に近い結果を得てみたいと思う。

＜引用文献＞

安部美帆　今野裕之（2007）状態自尊感情尺度の開発　パーソナリティ研究，第16巻，第１号 36－46.

Campbell, J.D. & Tesser, A.（1985）. Self-evaluation maintenance processes in relationships. In S. Duck&D. Perlman（Ed.）, *Understanding personal relationships*. Sage. pp. 107－135.

Gibbons, F. X., Benbow, C. P., Gerrard, M.（1994）. From top dog to bottom half：Social comparison strategies in response to poor performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 638－652.

Hider, F.（1958）. *The psychology of interpersonal relations*. New York：Wiley
（ハイダー，F. 大橋正夫（訳）（1978）. 対人関係の心理学　誠信書房）

磯崎三喜年（1988）. 友人選択と学業成績における自己評価維持機制　心理学研究，第59巻，113－119.

磯崎三喜年（1990）. 児童・生徒の学校活動に関わる諸要因について　―自己評価維持モデルの視点から―　愛知教育大学教科教育センター研究報告，第14号，35-44.

磯崎三喜年（1998）. 社会的比較と自己評価の維持　安藤清志・押見輝男編　対人行動学研究シリーズ６　自己の社会心理　誠信書房　pp. 107－110.

磯崎三喜年（2003）. 対人関係の親密さにおける自己システムの機能　国際基督教大学学報，I-A，教育研究 45，45－53.

桜井茂男（1992）. 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の影響　心理学研究，第63巻，第１号，16－22.

Stapel, D. A., & Johnson, C. S.（2007）. When nothing compares to me: How defensive motivations and similarity shape social comparison effects. *European Journal of social Psychology*, 37, 824－838.

Tesser, A.（1984）. Self-evaluation maintenance processes：Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin（Ed.）, *Boundary areas in social and developmental psychology*. Academic Press. pp. 271－299.

Tesser, A., Campbell, J. &Smith, M.（1984）. Friendship choice and performance：Self-evaluation maintenance in children . *Journal of personality and Social Psychology*, 46, 561－574.

Wood, J. V., Giordan-Beach, M, & Ducharme, M. J.（1999）. Compensating for failure through social comparison. *Personality and Social Psychology*, 79, 563－579.

巻末資料

○心理的に近い・関与度が高い条件

自分とAさんは大学に入ってからの友達です。自分達には共通の話題も多く，出会った当初からすぐに気が合い，今では自分とAさんはお互いの気持ちを素直に言い合える仲です。また，自分達は同じ学科なので，いつも同じ授業を選んで受講し，テストやレポート作成の際には共に協力したり，一緒に所属しているサークルのことについて何時間も話し込んだりと，学校やそれ以外の時間でも一緒にいることが多くあります。

ある時，Aさんが指導教官に呼び止められて何かを渡されているところを見かけました。気になって何を受け取ったのか聞いたところ，Aさんは特待生に選ばれその選考通知を受け取っ

たとのことでした。特待生になるということは自分の成績が認められることであり，授業料が減額されることもあって，自分自身もどうしても特待生になりたいと思い頑張ってはいたのですが，自分は結局選ばれず，Aさんが選ばれたという事実を知ることとなりました。

○心理的距離が近い・関与度が低い条件

自分とAさんは大学に入ってからの友達です。自分達には共通の話題も多く，出会った当初からすぐに気が合い，今では自分とAさんはお互いの気持ちを素直に言い合える仲です。また，自分達は同じ学科なので，いつも同じ授業を選んで受講し，テストやレポート作成の際には共に協力したり，一緒に所属しているサークルのことについて何時間も話し込んだりと，学校やそれ以外の時間でも一緒にいることが多くあります。

ある時，文部科学省による現代の大学生の教養に関する調査として，一般教養のテストが全国の大学生に対して一斉に行われました。このテストの結果は，各大学の上位10名にだけ通知が出されるとのことでした。自分にとってはまったく興味のないテストで，自分にはその通知が来なかったこともあり，通知が出されることすら忘れていました。そんな時，AさんからAさんにはその通知が来たことを聞きました。

○心理的に遠い・関与度が高い条件

自分とAさんは同じ学部の学生なので，学部棟内でたまにすれ違うことがあって，何となく顔は知っていました。しかし，同じ授業を受けることはほとんどなかったので，そういえばこんな人もいたなという程度の認識で，お互いに特に関わることもなく過ごしていました。

ある時，Aさんとその友人が廊下で話している傍を偶然通りかかったところ，Aさんが特待生に選ばれ，今その選考通知を指導教官からもらった，という話をしているのが聞こえてきました。特待生になるということは自分の成績が認められることであり，授業料が減額されることもあって，自分自身もどうしても特待生になりたいと思い頑張ってはいたのですが，自分は結局選ばれず，Aさんが選ばれたという事実を知ることとなりました。

○心理的に遠い・関与度が低い条件

自分とAさんは同じ学部の学生なので，学部棟内でたまにすれ違うことがあって，何となく顔は知っていました。しかし，同じ授業を受けることはほとんどなかったので，そういえばこんな人もいたなという程度の認識で，お互いに特に関わることもなく過ごしていました。
ある時，文部科学省による現代の大学生の教養に関する調査として，一般教養のテストが全国の大学生に対して一斉に行われました。このテストの結果は，各大学の上位10名にだけ通知が出されるとのことでした。自分にとってはまったく興味のないテストで，自分にはその通知が来なかったこともあって，そのような通知が出されることすら忘れていました。そんな時，Aさんとその友人の会話から，Aさんはその通知を受け取ったことを知りました。